

〔総特集にあたって〕

内と外からみたアフリカとアフリカ研究の現在

遠藤貢



はじめに

気候変動（CO₂排出削減）の影響を受ける形でも問題化し始めた、食料（価格の急騰）やエネルギー（代替エネルギーや石油価格の高騰）といった、地球規模、かつ地域横断的な問題が議題の中心とならざるをえない国際情勢のなか、こうした問題の影響としわ寄せを最も受けやすく、こうした問題が人びとの「生存」という生物学的な生死に直結する可能性が最も高い地域のひとつが、アフリカであることは疑いようがない。

こうした対応の急がれる課題が山積するなか、

に取り上げられ、国内のアフリカへの関心をひきつけるうえで重要な役割を果たした。

しかし、ある種お祭りムードであった二〇〇八年の第二四半期を過ぎて、アフリカに関する国内報道はかなり限定的で、その意味において「正常化」しているが、それがアフリカにかかわる問題の終焉を意味するものではまったくないことも紛れない事実である。

今回の『地域研究』では、はじめてアフリカという地域に焦点をあてて、内と外という観点からアフリカの現在を読み出す多角的な作業を行うことになった。小論は、その濃密な論文群の前座として、ここに展開されるさまざまな論考への誘いをおもな目的とするものである。そしてその際に、内と外からみてアフリカを取り巻く問題群がどのように変遷し、現在にいたっているのかについて、筆者が専門とする政治学分野におけるアフリカにかかわる研究の展開の変化を切り口として提示することにした。

二〇〇八年五月二八日から三〇日の横浜での第四回アフリカ開発会議（TICAD IV）と、そして七月七日から九日の北海道・洞爺湖でのG8サミットが日本で同時開催された。そしておそらくは空前絶後のこの外交の場で「アフリカ問題」が主要な議題として扱われたことはまた記憶に新しい。これに加え、とくにTICAD IVの折には横浜を中心に空前の規模でアフリカにかかわるサイドイベントが開催された。さらにU2のボノやセネガルのユッスン・ドール、さらにはコロンビア大学のJ・サックスなど著名人の来日もあり、アフリカに関する国内メディアの関心はきわめて高く、一部の新聞では外部編集者を招く形で一〇ページにわたる特集を組むなど、きわめて異例ともいえる形でアフリカが集中的

I 三冊の『世界政治におけるアフリカ』

筆者は八年前に書いたレビュー論文のなかで三冊の『世界政治におけるアフリカ』(Africa in World Politics) (Harbeson and Rothchild 1991; 1995; 2000) を比較検討したことがある(遠藤 2000)。ここでははじめにそこで紹介した内容を、部分的に修正しながら用いることとしたい。その理由は以下のようなものである。つい最近『世界政治におけるアフリカ』の第四版が八年の時を経て、さらには二一世紀になつてはじめて上梓され、そこには三版までには想定できず、また本特集のなかでも扱われることになる内と外からみたアフリカにかかわる興味深い問題群が含まれているからである(Harbeson and Rothchild 2008)*。

初版から第三版までは、おもにアメリカのアフリカ研究者の手による一四ないし、一五編からなる論文集であり、一九九一年以降一〇年の間に二回の改訂を経て二〇〇〇年に第三版が出版された。そのなかには初版以来三回にわたって加筆修正されながら収録された論文がある一方で、それぞれの改訂の際

に論文の大幅な入れ替えが行われているほか、編集者であるニューヨーク市立大学のハーブソン (John W. Harbeson) とカリフォルニア大学デービス校のロスチャイルド (Donald Rothchild) が執筆している巻頭論文のなかで、それぞれの改訂時期における問題関心と編集方針をある程度明確化している。したがって、この三冊の著作を比較検討する作業を通じて、おもにアメリカのアフリカ研究における国際政治のなかにおけるアフリカの位置付けと、その主要な問題関心とその変容が明らかにできると考えられる。

1 全体構成の比較

まず、初版から第三版までの全体構成を俯瞰しておこう。初版の構成は以下のとおりである。

- 第1章 ポスト冷戦期の国際政治におけるアフリカ——変化するアジェンダ
- 第一部 アフリカ国際関係の規定要因
- 第2章 植民地主義の遺制 (クラフォード・ヤング)
- 第3章 アフリカと世界経済 (トーマス・カラ

トマン)

- 第14章 アフリカにおける地域的平和構築——促進者 (Facilitators) としての大国の役割 (ドナルド・ロスチャイルド)
- 第15章 大国と南部アフリカ——対立か、協力か (ヴィタレー・ヴァシルコフ)

また、第二版は次のとおりである。本版では副題として「冷戦後の挑戦」が新たに付されている(なお、新たに収録された、あるいはタイトルを変更して書き直されている論文に関しては太字で示している)。

- 第一部 イントロダクション
- 第1章 世界政治におけるアフリカ——リニールと深まる危機のはざままで
- 第二部 アフリカの再周辺化の諸パラメータ
- 第2章 植民地主義の遺制 (クラフォード・ヤング)
- 第3章 アフリカと世界経済 (トーマス・カラヒール)
- 第4章 アフリカと他の文明 (アリ・マズルイ)
- 第5章 不履行のなかの従属——ヨーロッパ連合とアフリカの関係 (ジョン・レイベ

- 第4章 アフリカと他の文明 (アリ・マズルイ)
- 第二部 現代アフリカにおける国際紛争地域
- 第5章 南部アフリカ——長引く革命 (ケネス・グルンデイ)
- 第6章 アフリカの角におけるアイデンティティーをめぐる国際政治 (ジョン・ハーブソン)
- 第7章 リビアの冒険主義 (Adventurism) (ルネ・ルマルシヤン)
- 第三部 アフリカと諸国家 (powers)
- 第8章 合衆国とアフリカ——将来に向けての争点 (ジェフリー・バーブスト)
- 第9章 アフリカとヨーロッパ——「特別な関係」の希薄化 (ジョン・レイベンヒル)
- 第10章 アフリカと中東——収束と分散の様式 (ナオミ・ハザン、ビクター・レヴァイン)
- 第11章 ソ連とアフリカ (マリーナ・オッタウエイ)
- 第四部 アフリカにおける国家間紛争の管理
- 第12章 ラゴス・スリー——サハラ以南アフリカにおける経済における地域主義 (キヤロル・ランカスター)
- 第13章 アフリカ国家間交渉 (ウィリアム・ザー

- ンヒル)
- 第三部 アフリカ国際関係における地域的な舞台
- 第6章 アフリカの角における冷戦後の政治——強まる政治的アイデンティティーの追求 (ジョン・ハーブソン)
- 第7章 アパルトヘイト後の南アフリカと南部アフリカ (ジェフリー・バーブスト)
- 第8章 フランス・アフリカ関係のなかにおける仏語圏アフリカ諸国 (ガイ・マーティン)
- 第9章 ラゴス・スリー——サハラ以南アフリカにおける経済における地域主義 (キヤロル・ランカスター)
- 第四部 主要争点
- 第10章 合衆国とアフリカにおける紛争管理 (ドナルド・ロスチャイルド)
- 第11章 アフリカ国家間交渉 (ウィリアム・ザートマン)
- 第12章 アフリカにおける民主主義の促進——以降期のアメリカと国際社会の政策 (ラリー・ダイアモンド)
- 第13章 政治的・軍事的安全保障 (ハーマン・コーエン)

第14章 主権と責任の和解へ向けて——国際的 人道活動の基礎（フランシス・デン）

第三版は次のとおりである。なお、この版の副題は「激動期にあるアフリカ国家システム」となっている（なお、新たに収録された、あるいはタイトルを変更して書き直されている論文に関しては太字で示している）。

第一部 イントロダクション

第1章 アフリカ国家と激動期のアフリカ国家システム

第二部 歴史的パラメータ

第2章 植民地主義の遺制（クラフォード・ヤング）

第3章 アフリカと世界経済（トーマス・カrahヒー）

第4章 リニューアルするアフリカにおけるヨーロッパ——ポストコロニアリズムを超えて？（ギルバート・カディアガラ）

第5章 アフリカと他の文明（アリ・マズルイ）

第三部 紛争管理とアフリカ国家

第6章 アフリカ国家間交渉と国家のリニュー

以上が初版から三版までの構成と収録論文のタイトルであるが、つきにこうした構成の変化、とりわけ編集者が執筆している巻頭論文に、一九九〇年代のどのようなアフリカにおける状況、さらにそれに対する認識の変化が反映されているのかについて考えてみたい。

初版から第三版までの構成を比較してみると、

一九九〇年代におけるアフリカをめぐる問題の所在が少しずつ変化していることが看守できる。初版では、アフリカと他の主要国、あるいは地域との関係、さらにはアフリカにおける地域的な課題が、網羅的に扱われている印象を受ける。第二版（一九九五年）では、約半数の七本の論文が入れ替えられており、ヨーロッパとアフリカの関係、アパルトヘイト終焉にもなう南部アフリカ、フランスの対アフリカ政策、アフリカにおける紛争・安全保障とその問題への外部勢力の関与のあり方（人道的介入を含む）が、新たに取り上げられている。したがって、ここでは重要な課題に焦点をあてる方針への変化がみられる。この変化の背景としては、一九九四年という年に目を向ける必要がある。この年の一月にはフラン圏首脳会議において、CFAフランの対フランス・フラン平価の五〇パーセント切り下げが決定されて

アル（ウイリアム・ザートマン）

第7章 アフリカにおける内戦解決に対する合衆国の非関与の影響（ドナルド・ロスチャイルド）

第8章 ECOMOGからECONOG II——シエラレオネへの介入（ロバート・モーターメール）

第9章 世界情勢の中のアフリカ（キャロル・ランカスター）

第10章 外部支援を受ける民主化——理論的問題群とアフリカの現実（ジョン・ハーブソン）

第四部 グローバル化と変容する国家システム

第11章 アフリカと世界経済——周縁化の持続か、新たな関与（engagement）か（ニコラス・ファンデワール）

第12章 アフリカの弱い国家、非国家主体、国家間関係の私物化（ウイリアム・レノ）

第13章 西側、そしてアフリカの平和維持軍——動機と機会（ジェフリー・バーブスト）

第14章 大湖地域の危機（ルネ・ルマルシャン）

第15章 主権と責任の和解へ向けて——国際的 人道活動の基礎（フランシス・デン）

いる。また、四月には南アで史上初の全人種参加の国政選挙が実施された一方で、ルワンダでは被害者の合計が八〇万人ともいわれる大虐殺が同じ四月に始まっている。そして、これを期に大量のルワンダ難民が隣国ザイール、タンザニアに流出した。これを受けて国際社会の対応のあり方、とくに平和維持活動をめぐる問題が大きな課題となっている。

さらに第三版（二〇〇〇年）では、一五本の論文のうち一一本までが新たな論文である。とくに、紛争管理とアフリカの問題が第二版の争点の一部から格上げされ、新たにパートとして導入され、そのすべての論文が新たに収録されたものである点には注目する必要がある^{*}。第六章から第八章までの三本の論文は、一九九〇年代後半におけるアフリカにおける内戦の多発と、この問題に対するアメリカの非関与、地域機構の役割などを検証している。また、ランカスター（Carol Lancaster）の論文は援助の効率性と効果、ハーブソンの論文は一九九〇年代の「外から」の民主化圧力の功罪を取り上げている。いずれも、これまでのアフリカへの関与のあり方を再考する試みとして位置付けることができる。さらに第四部では、グローバル化とアフリカ国家をテーマとして新たに四本の論文を収録している。と

2 巻頭論文の比較

つぎに、初版から第三版までの、編集者の手による巻頭論文を比較検討することで、「世界政治におけるアフリカ」に関する視点の変遷をたどっておこう。巻頭論文とはいえ、それぞれの版を構成する論文群における議論を踏まえた記述がなされているので、各版における議論を集約している論文という位置付けにもなっている。

初版の巻頭論文における鍵になる概念は、周縁化 (marginalization) である。いは周縁化 (peripheralization) とすることができるともいえる。むしろここでのこれらの概念は従属論、あるいは世界システム論における「周辺」概念とは異なっている。ここでの周縁化概念は、欧米諸国が途上地域に対して、「表には出ない形の支配」(hidden control) は維持しながらも、とくに二国間経済関係を大幅に減らし、相対的にアフリカとの商取引関係を減らしている現象 (Harbeson and Rothchild 1991: 11) を指している。また、冷戦の終焉によって戦略的重要性を減じたアフリカをめぐってどのような外交課題があり、また新たな国際秩序形成の過程においてどのよ

くに、ルワンダ、ブルンジ、旧ザイール(コンゴ民主共和国)といった大湖地域における危機と国際社会の関与のあり方、さらにはレノ (William Reno) の論文にみられるように、西アフリカにおける内戦の分析を通じて明らかになってきた近年のアフリカ政治研究の成果がとり入れられている。

こうして、論文の出入りの激しいなかにおいて、初版から第三版まですべての版で収録されている論文は、それぞれ部分的な改訂を加える形で収録されてきた植民地主義の影響を論じたヤング (Crawford Young) の論文と、カラビー (Thomas M. Callaghy) による「アフリカと世界経済」に関する論文、そして「アフリカと他の文明」に関するマズリ (Ali A. Mazrui) の論文、どれもアフリカの歴史に関わっている三本だけである。この事実は、これらの論文が国際社会におけるアフリカを考えるうえでの基本的な考え方を示す論文であることを示すと同時に、アフリカにとって一九九〇年代がいかに激動の時代であったかということを改めて示していると考えられることのできるのである。

うな新しい争点を見出すことができるのかに力点が置かれている。とくにここでは、一九八〇年代までに、欧米とアフリカとの経済関係が実体のレベルにおいては大幅に減少 (disengage) している一方で、構造調整に代表される国内の経済改革、さらに国内の政治改革を求めるバイのドナー、そしてとりわけIMF、世銀等マルチのドナーの圧力が強まっている状況の変化を示している。つまり、二国間レベルでの関係の後退 (bilateral disengagement) と多国間の国際組織による関与の増大 (multilateral engagement) という傾向が、一九九〇年代初頭までに顕在化してきているという主張である。こうした文脈のなかで、次の四点を検討課題として指摘している。第一に国際体系におけるアフリカ国家、第二に構造調整の評価とアフリカ経済の展望、第三に新たな国際環境のなかにおける人権、エイズ、麻薬、環境といった社会的、人道的課題、第四に欧米の追随ではない、アフリカ独自の文化に根ざした開発、政体の実現可能性の展望である。したがって、この段階では、アフリカの周辺化をそれだけで否定的に評価しようとするのではなく、新たな政治経済的な展開の転機につながる可能性もある好機としてとらえようとする将来展望をも含んでいた。

第二版では、基本的な構成は初版と変わっていないが、焦点は経済から政治にシフトしている。とくに一九九〇年代初期以降出てきた援助における政治的コンディショナリティー (political conditionality) の問題を構造調整との比較のなかにとらえようとしている。その意味では、この政治的コンディショナリティー、政治改革、民主化が、第二版の中心的なテーマになっているとみてよい。そして、構造調整と政治的コンディショナリティーという経済と政治の両方の改革への圧力がもつ矛盾と問題を示す試みがなされている。両者の相違としてあげているのは、たとえば、構造調整がアフリカ経済と国際経済をより強く結びつける方向への改革を指向していたのに対して、政治的コンディショナリティーはそれ自体直接的には国際社会との関係を強める目的がなかった、先進諸国がアフリカへ発したメッセージがかなり重層的であることが指摘されている (Harbeson and Rothchild 1995: 11)。この結果、アフリカ諸国は経済、政治の両方の課題を同時に解決する必要を迫られることになるが、編者はこうした外の対応はアフリカにおける問題を複雑化し、かえって逆効果であったことが一九九〇年代前半における民主化の失敗の事例に明らかになってきたとし

ている。

さらに、こうしたドナーのアプローチは、「目的としての民主化はじめにありき」という前提に立っており、今後アフリカの国家を危機に直面させる可能性を秘めるとして、批判する姿勢を示している。そして、ポスト冷戦期におけるアフリカの課題としては、外から押し付けられるのではなく、アフリカが主体的に自らの将来を構想することにあるという見解を述べて結んでいる。第二版では、周縁化という国際社会のなかにおけるアフリカの位置付けの変化から、そのもとの国際社会の対応がもたらすアフリカ諸国における問題群に焦点が当てられている。しかし、初版では先行きに一定の明るさを見ていたのに比べ、民主化が必ずしも成功しないなどの経験的な材料をもとに、やや悲観的な将来展望を行っている。

第三版では、構成が大きく変更されただけでなく、一九九〇年代後半のアフリカ大陸での状況を反映し、激動し、崩壊の淵にもあるアフリカの個別の国家と、それらの国家群からなる国家システムに焦点が当てられている。とくに、ポスト冷戦期のアフリカにおいては個別の国家の弱さと国家システムの脆弱性が相互に悪影響を及ぼしあって、今日にいた

関係（ここでは国家システムと名づけられている）にまで悪影響を及ぼしている。そして、国家システムに関しては、アフリカ統一機構（OAU）で約されている、メンバー国の国家主権と領土的一体性の尊重、内政不干渉等の規範・原則にもとる軍事行動が、とくに、「アフリカの角」、大湖地域、西アフリカでしばしば生じていることを問題視している。こうした軍事介入によって弱体化するのは、それぞれの国家だけではなく、これまでのとりあえずのアフリカの秩序を維持するうえでの主権、内政不干渉といった規範にもとづいた国家システムでもあるからである。国家の脆弱性そのものが国家システムの弱体化にも波及するアフリカの現状への強い懸念が、ここに示されている。

3 三冊の『世界政治におけるアフリカ』 にみられる諸論点

以上の各版の構成、巻頭論文における議論には、一九九〇年代前半から一九九〇年代末にかけてのアフリカにおける状況と、それを取り巻く環境の変化、さらにこうした変化をどう認識しようとするのかというアメリカのアフリカ政治研究者の関心がか

るアフリカの内戦とその拡大がもたらされたとする見解を示している。こうした現状は、とくに初版において示されていたアフリカにおける政治経済的な「ルネサンス」が消滅しつつあることを示しているという悲観論を、さらに強める論調になっている (Harbeson and Rothchild 2000: 6)。^{*}

ひとつの重要な論点として、民主化と（おもに統治装置としての）国家の強化という二つの課題間の関係を問題としている。いいかえれば、民主化はそれ自体がひとつの目標であるといえるが、それでは民主化は国家を強化するうえでどのような道具的・機能的な (instrumental) 重要性を有しているのかという問題である。この問題に関して以下の具体的な事例を示しながら、比較している。南部アフリカのモザンビーク、ナミビア、南アフリカなど、交渉と協定にもとづいた民主化の推進が行われた国の場合には、民主化と国家機能の回復が深く関係する形で展開しているという事例となっている。しかし、エチオピアとエリトリアの事例は、協定締結が成功しない場合には民主化、国家再建双方の課題においてマイナスの影響が出るばかりでなく、エチオピア、エリトリア、ソマリアなどを含む「アフリカの角」(Horn of Africa) といわれる地域全体の国家間

なり反映されてきているということができよう。初版の段階では、周縁化、あるいは周辺化という、冷戦後の国際社会におけるアフリカの位置付けとその両義的な意味あいに関する議論が中心であったのに対し、第二版ではとくに、国際社会のアフリカへの関与のあり方を政治的コンディショナリティー、民主化にみて、こうした関与のもつ問題性を明らかにしようとする方向性が示されていた。そして第三版においては、部分的には民主化圧力に起因しているアフリカの内戦に焦点があたり、これがもたらしているアフリカにおける個々の国家の機能不全、破壊、さらには、こうした国家への「介入」の現実によって弱体化しつつある国家システムというアフリカ大陸の政治秩序のあり方が大きく問い直されていた。

また、アフリカの内戦もグローバル化という文脈における政治経済と深く結びつく傾向をみせてきている。とくに第三版に論文を寄稿しているレノのアフリカの紛争をめぐる一連の作業 (Reno 1988) は、「影の国家」(shadow state) や「軍閥政治」(warlord politics, warlordism) とした概念をもちこむことを通じて、非常に興味深い論点を提供している。さらに、地域安全保障における地域機構の役

割や、援助の問題に関しても、『世界政治におけるアフリカ』のなかでの議論に限らず、昨今さまざまに議論されており、理論的にも、政策的にも重要な研究・検討分野を構成するものとなっている。

II 四冊目の『世界政治におけるアフリカ』

二〇〇八年同じ編者ハーブソンとロスチャイルド編の第四冊目の『世界政治におけるアフリカ』が出版されたことは既述のとおりである。先に倣い、まずはこの論文集の構成を確認しておくことにしよう。なお、この新たな版では『政治秩序を改革する』(Reforming Political Order)という副題がつけられている(なお、新たに収録された、あるいはタイトルを変更して書き直されている論文に関しては太字で示している)。

1 全体の構成とその特長

第一部 イントロダクション

第1章 アフリカン・ルネッサンスの暗示——近年の進歩、長期にわたる挑戦(ジヨ

ン・ハーブソン)

第二部 歴史的パラメータ

第2章 植民地主義の遺制(クラフォード・ヤング)

第3章 アフリカと世界経済——依然として身動きがとれないのか(トーマス・カラヒ)

第4章 アフリカと他の文明——征服と征服への対抗(アリ・マスルイ)

第三部 アフリカの国家と国家システム——再創造と復興

第5章 アフリカの弱い国家における民主化を約束する(ジヨン・ハーブソン)

第6章 権威を求めて——アフリカにおける市民社会と権利基盤の言説(アイリ・マリ・トリップ)

第7章 エイズ危機——アフリカにおける国際関係とガバナンス(アラン・ホワイトサイド、アノキー・パリキー)

第8章 アフリカ国際関係の私物化(ウィリアム・レノ)

第9章 アフリカ国家間交渉と秩序の改革(ウィリアム・ザートマン)

第四部 グローバルな関係——関与、競争、責任

第10章 平和なアフリカ国家間関係を実現するうえでのアフリカの役割(ドナルド・ロスチャイルド)

第11章 アフリカにおけるテロとの戦い(プリントン・N・ライマン)

第12章 成熟期におけるヨーロッパとアフリカ関係(ギルバート・カディアガラ)

第13章 アフリカにおける中国の関与——射程、重要性、影響(デニス・M・タル)

第14章 主権と責任の和解へ向けて——国際的人道活動の基礎(フランシス・デン)

過去の改訂にしろ、初版から第三版まですべての版で収録されていた、アフリカの歴史に関わる第二部の三本の論文は、第四版においても、それぞれ一部をアップデートする形で部分的な改訂が加えられて残る形になっている。しかし、第三部と第四部の論文は大幅な入れ替え作業が行われている。以下では、巻頭論文を中心に検討しながら、本版に現れている特長をまとめておくことにしたい。

編者のハーブソンは従来からアフリカにおける民主化を分析してきた研究者であるが、第五章と第六

章は、アフリカにおける「弱い国家」という前提のもとにおける民主化にかかわる問題領域を改めて確認すると同時に、第一四章におけるデンの議論との連関のなかで、民主化と国家の強化という第三版で提起した問題意識を継続して論じている。その意味では、係属してアフリカにおける国家の問題が、その中心に位置づけられているとみることが可能である。とくに、紛争や民主化などの国家の危機、あるいは政治変動が、国家の再構築につながる契機として位置付け直されており、それをアフリカにおける国家の(おもに一九六〇年代の政治独立と対置された)「第二の」独立というレトリックを用いて表現している。ここには、人びとの参加を軸とした政治体制(regimes)の変革を通じた新たな国家形成への期待とともに、これまで「新家産主義」(neopatrimonialism)として議論されてきたアフリカの政治の特徴の変革の可能性をみようとしている。むしろ、レノの議論に典型的に現れるように、グローバル化とのかかわりのなかで国際関係が「私物化」されるといふ汚職、さらには「新家産主義」にもつながり、アフリカにおける長期にわたる意味合いをもつ現象が存在していることにも言及している。

また、新しいテーマも扱われている。第七章で扱われているエイズの問題は、初版以降潜在的な問題として意識されていたが、単独の論文として記される形で、アフリカにおける問題の深刻さを改めて喚起する形になっている。ザートマンによる第九章では、大陸レベルの地域機構として大きく組織替えが行われたアフリカ連合(AU)、そしてアフリカの指導者たちの手によって作成されたアフリカ開発のための新たなパートナーシップ(NEPAD)、そしてそのなかにおいてとくに相互にガバナンスを監視する目的で設立されたアフリカン・ピアレビュー・メカニズム(APRM)など二一世紀初頭におけるアフリカ諸国主導の試みが批判的に取り扱われている。また、外部からの関与として、九・一一に端を発するアメリカの対アフリカ政策(「テロとの戦い」を含む)が第一〇、一一章で取り扱われ、またヨーロッパとの関係が第二章で扱われている。これらは従来の版との連続性が意識されたものといえる。その意味では、外部からの関与という点で大きな注目点として浮上しているのが、第三章に一章を割く形で扱われているほか、カラヒーが担当している国際政治経済における変化を扱った第三章でも大きく取り上げられている中国の動向

けるコミュニティレベルの変容から国家の変容にいたる広範な問題が扱われている。その後、アフリカの「独立の年」である一九六〇年から約半世紀を迎えようとする現在を改めて検証しようとする川端論文が、長期の視点に立ったアフリカの変容の捉え方を示している。

内なる視座としては、現在アフリカにおいて残された紛争を抱えるスーダンが抱える問題に関し、一九八九年以降の動向を丹念に追い、「移行期」の課題に包括的な分析を加えた栗田論文がまず、その問題状況を明らかにしている。そして、選挙という「民主化」の手続きとの兼ね合いで発生した、まだ記憶に新しいケニアにおける選挙結果をめぐる暴力の問題を歴史的な視点を交えて検証した津田論文と、現在も継続して問題が生み出されている「失敗国家」ジンバブエの政治を「クレプトクラシー」という視点から考察した井上論文が続く。そして、あるいはこうした問題を含む「民主化」の過程で(特に「分権化」との連関で)注目される「伝統的権威」の政治的意味などが取り上げられる(松本論文)。したがって、「内なる視座」としてまとめられている論文は、アフリカにおける「民主化」を批判的に検証するという方向がさまざまに示されていると考

である。アフリカとの関係における「中国もの」は、二〇一二年の間に急速に出版され始めている(Alden 2007; Alden et al. 2008; Manji and Marks 2007; Guerrero and Manji 2008; Kitssou 2008)。これは、とくに二〇〇六年の中国アフリカサミットに加え、資源に焦点をあてた積極的な外交が展開されていることを反映する形となっており、現実的な問題関心と整合するものといえる。

2 本特集との関連

『地域研究』における本号でのアフリカ特集は、今日問題となっているアフリカ地域の問題を内なる文脈と、外からの視点の交差する中に描こうとする論文によって基本的には構成されている。その意味では、外との関連をより強く意識している『世界政治におけるアフリカ』とはそのスタンスを異にはしている。本号に寄稿された諸論文の前に、アフリカとアフリカ研究の現在と今後の展望について自由な意見交換を行った座談が掲載されている。ここには、長年アフリカにおける研究経験を持ち、さまざまなデイシプリンを持つ研究者が近年考えている問題が記録されており、テーマとしてはアフリカにお

えてもよい。

内なる視座に続く、外からの視座のほうが、『世界政治におけるアフリカ』四版との関連は深い。本特集では、さまざまな課題を抱えるアフリカと国際社会の関係をそうした課題や外部主体とのかかわりにおいて考察を加えている。武内論文は、アフリカにおける紛争と「紛争後」への国際社会の対応の様態と課題を明確な形で示している。植民地主義など歴史的に関係の深い宗主国のアフリカ政策の現在について、加茂論文はサルコジ大統領のダカールでの演説の分析を通してフランスの政策の現在を解き明かそうとしている。また『世界政治におけるアフリカ』四版でも新たに扱われることになった中国からの視座にかかわるものとしては、二〇〇七年末のマラウイの承認変更問題(台湾から中国へ)を事例とした、中国外交のダイナミズムが鮮烈な形で示される(川島論文)。日本の援助機関に在籍し、実務経験を持つ執筆者が、ウガンダの分権化政策をめぐるドナーのかかわりを現地政権の思惑との絡みを描いている(笹岡論文)。そして、『世界政治におけるアフリカ』では扱われてこなかった日本との関係を広く考察した片岡論文が、外からの視座のセクションを締めくくる。

また、本特集号のひとつの特徴となると思われるのが、「日本に息づくアフリカ」という小特集である。多くの人が経験していると思われるように、日本国内にもさまざまな形で多くのアフリカからの「滞在者」「居住者」がいる。この実態の一端を明らかにするための三本の論文が掲載される（和崎論文、川田論文、若林論文）。日本におけるアフリカの現在を垣間見るために格好の論文群である。

おわりに

アフリカで生じているさまざまな問題は、決して現在のグローバル化ともいわれる世界と隔絶したところで起きているわけではなく、むしろ密接にかかわりあうなかで生起している。むしろ、現象としては、アフリカの各地域の固有性とも呼べるような地域的特性を絡めとりながら事態は展開しているわけではあるが、「現代的」な文脈で生起している現象の「共時性」を十分に意識して理解する必要があるのではないかということ、いくつかの機会に述べてきた。とくに国際政治の議論では、ときに前近代、近代、ポスト近代と分類された国家群が提起さ

れ、アフリカは、前近代、あるいは混沌圏といった範疇に区分されることがしばしばある。おそらく、政策的な観点から世界を監視し、管理し、超大国主導の国際秩序を実現するための対象の把握のうえで、こうした分類は一定の便宜性をもつものではあるにせよ、アフリカ研究の立場からは大いなる違和感をもたずにはおられないというのが率直なところではなからうか。

本特集で扱われる問題やその評価などを通じて、改めてアフリカの現在と現代世界のつながりが確認できれば、ささやかながらそのねらいの一部は達成できたことになると考えているところである。

●注

- *1 なお、編集者の一人であったロスチャイルドは二〇〇七年に逝去している。
- *2 ザートマンの論文だけは第2版までの論文に手を入れた論文である。
- *3 この版のキー概念である激動(Exc)は結果的に、衰退(Decay)をもたらしうるとする見解のなかにもこうした考えが垣間見られる。
- *4 括弧つきの「民主化」概念については、遠藤(2005)を参照のこと。

●参考文献

- Alden, Chris (2007) *China in Africa*. London: Zed.
- Alden, Chris, et al eds. (2008) *China Returns to Africa: A Rising Power and a Continent Embrace*. London: Hurst.
- Guerrero, Dorothy-Grace and Firoze Manji, eds (2008) *China's New Role in Africa and the South: A Search for a New Perspective*. Oxford: Farnham.
- Harbeson, John W. (1995) Africa in World Politics: Amid Renewal, Deepening Crisis. Harbeson, John W. and Donald Rothchild (eds), *Africa in World Politics: Post-Cold War Challenges* (Second Edition). Boulder: Westview, pp.3-20.
- Harbeson, John W. and Donald Rothchild (1991) Africa in Post-cold War International Politics: Changing Agendas. Harbeson, John W. and Donald Rothchild (eds), *Africa in World Politics*. Boulder: Westview, pp.1-15.
- (2000) The African State and State System. Harbeson, John W. and Donald Rothchild (eds), *Africa in World Politics: The African State System in Flux* (Third Edition). Boulder: Westview, pp.3-20.
- eds. (1991) *Africa in World Politics*. Boulder: Westview.
- eds. (1995) *Africa in World Politics: Post-Cold War Challenges* (Second Edition). Boulder: Westview.

- eds. (2000) *Africa in World Politics: The African State System in Flux* (Third Edition). Boulder: Westview.
- eds. (2008) *Africa in World Politics: Reforming Political Order*. Boulder: Westview.
- Kitissou, Marcel, ed. (2008) *Africa in China's Global Strategy*. London: Adonis and Abbey.
- Manji, Firoze and Stephen Marks, eds. (2007) *African Perspectives on China in Africa*. Oxford: Farnham.
- Reno, William (1995) *Corruption and State Politics in Sierra Leone*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (1998) *Warlord Politics and African States*. Boulder: Lynne Rienner.
- 遠藤貢 (2000) 「変革期世界とアフリカ」「国際関係論研究」第一四号、一―二五頁。
- (2005) 「『民主化』から民主化へ。——『民主化』後サブサハラ政治過程と政治実践をめぐって」『アジア経済』四六巻一―二号、一〇―三八頁。
- (2007) 「内と外の論理からみたアフリカ国家とその変容」『アフリカ研究』七一号、一〇七―一一八頁。

(えんどう・みつき／東京大学大学院総合文化研究科)